



にほしま

ハワイ成功者列伝



前編

夢を掴んだ 大槻 幸之助

寛永 6 年 4 月 6 日生 宮城県柴田郡大河原町 出身

明治 10 (1877) 年	大河原村ほか 5 か村の衛生員
12 (1879) 年	同勤業委員
13 (1880) 年	小山田ほか 2 か村の村会議員
14 (1881) 年	柴田・刈田両郡の 勤業委員
15 (1882) 年	内田共進会へ大豆出品 第 2 等賞
	奥羽 6 県共進会
	大豆 第 1 等賞・米 第 3 等賞・砂糖 第 4 等賞
18 (1885) 年	横浜出航

1901 年。左からミネ、幸之助、トシ、はる。

彼の経歴から見えてくるものは、「農業の理論と実務を具現化した農業人」と「社会的信用を手にした社会人」の姿である。その彼が何不自由のない生活を捨てて突然ハワイ渡航を決断する。

明治 18 (1885) 年 2 月
ハワイ島パワイコウに就労、同時に日本人移民の取りまとめ役に指名される。

明治 19 (1886) 年 7 月
日本人労働者の監督兼通訳

明治 23 (1890) 年 6 月

プランテーション直轄店の運営委託
パワイコウ全プランテーションで働く
日本人労働者の総監督となる。

明治 28 (1895) 年
カラワ・プランテーションの支配人となる。

就労初日、大槻を一目見た経営者はすぐさま日本人グループ 30 人のまとめ役に。1 年後、監督に引き立て、10 年後にはプランテーションの経営をまかせた。

日本人移民がこのような短期間のうちに経営者の一員に加えられた例はない。

サクセス・ストーリーはこの後も続くが、帰国後語った農業雑誌のインタビュー記事に目を奪われる。移民資料としても貴重な証言であり、記録である。まずはこれを第一部として編集した。

就業規則

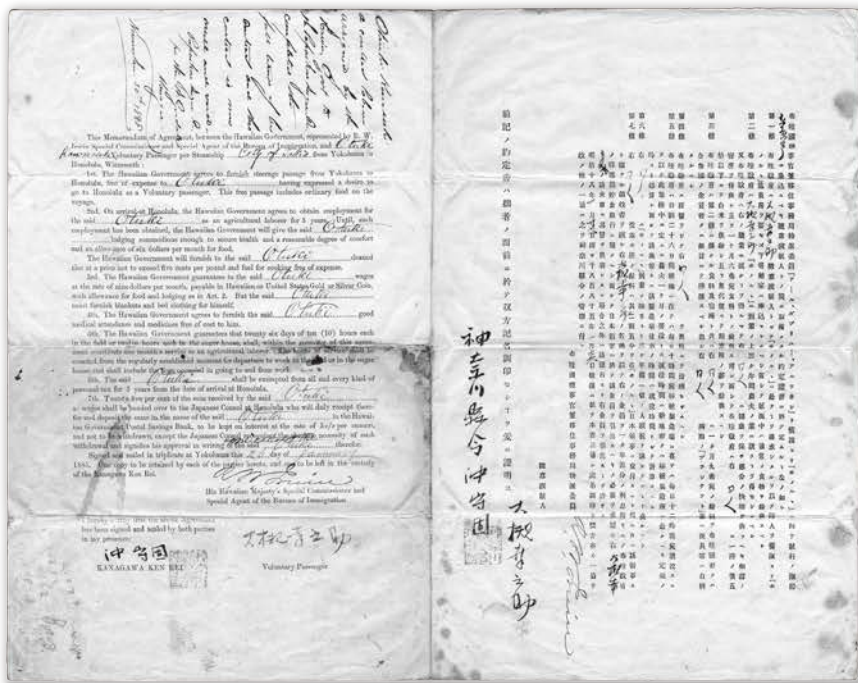
就労初日の明治 18 (1885) 年 2 月 13 日、大槻幸之助らは雇主から次のような就業規則を言い渡された。

- 1 ルナは雇主の代理者であり、その指図には従うこと。
ルナとは現場監督人のことで通常馬に乗り 30、50 人の労働者を指揮監督した。作業中の私語は禁止、休けい時間は昼休みしかなくひたすら働くことを強いられた。馬をけしかけ、むちをふるうルナもいた。
- 2 鐘は 3 回鳴らせる
①朝 4 時は起床
②5 時は朝食
③6 時は出発の合図。このほかは非常を知らせる鐘であり、急変を知らせるので支配人宅へ集合すること。
- 3 日中飲酒して往来しないこと。
飲酒は最大の娯楽、雇主は時間外の飲酒やトラブルに手をやかされた。初めてきた日本人移民に事前注意を与え厳守を求めた。
- 4 婦人に対し下品な言葉を使わないこと。肌をみだりに露出しないこと。
粗野な言動、風紀上の注意も同様であった。
- 5 人通りの多い場所や橋上で馬に乗って走らせないこと。
馬を交通手段として一般の労働者が利用することとはなかった。耕馬のことを指すのかも知れない。
- 6 ハワイはキリスト教国であるから日曜日には仕事をしないこと。
日本人移民のほとんどは仏教徒であった。入信の強要はなかった。
- 7 無届の欠勤・休勤はしないこと。
病欠以外、罰金刑や刑事罰の対象になった。欠勤は無給扱いで、有給休暇はなかった。

労働契約書

大槻幸之助が神奈川県沖守固立会のもとハワイ国総領事アルウィンと結んだ労働契約書。3 つの問題点があった。

- ① 労働時間には現場への往復時間を含み、時間外労働は賃金を加算とあったが守らないプランテーションも多かった。
ハワイ国は日本人移住民局を設置するなどの対策を取ったが、全てのプランテーション経営者に徹底周知することは困難であった。違反者には罰金刑を課すなどして、労働者を保護する具体的条項を明文化すべきであった。
- ② 良医を配置して移民とその家族を無料で治療するにあつたが、病気であることさえも認めず農地に追い立てたり、最初から、医者が不在のプランテーションも多かった。
- ③ 住宅は支給とあったが、政府と日本人移民は当然自国の住居と同等と考えた。ところが、草葺き屋根の日本の馬小屋程度のもので、水道・排水・風呂・台所・トイレも満足なものがなく、不衛生そのものであった。官約移民初期の死亡原因の多くはここに起因した。住居の構造・間取り・設備をもっと具体的に示させた契約書を作成すべきであった。



和英文併記の労働契約書・3 部作成 紙質画用紙程度 たて 370 × よこ 465 mm

JICA 横浜 海外移住資料館には、第一回官約移民としてハワイへ渡った大槻幸之助（宮城県出身）に関する資料が収蔵されている。この資料は、2004 (平成 16) 年 11 月、大槻幸之助のご家族から寄託されたものである。寄託資料の総数は約 700 点にもおぼり、大きく分けて、5 つの時代（ハワイ渡航前の宮城、ハワイ、カナダ、台湾、帰国後）に分類される。文書類、写真類がその大部分を占めており、文書類の中には、官約移民の労働契約書、ハワイ再渡航時のパスポート、手紙、日記、メモ帳、帳簿類、辞令や感謝状などが含まれている。ハワイ官約移民や初期ハワイ移民の歴史を知る上でも、大変貴重な資料である。

「官約移民の証言」 —大槻幸之助資料—

官約移民の送出は、1885 (明治 18) 年から 1894 (明治 27) 年までの 10 年間続けられ、約 29,000 人の日本人が契約労働者としてハワイへ渡航した。驚くことには、宮城県からはただひとり、大槻幸之助のみである。宮城県令の勧めでハワイへ移住したとされているが、これらの寄託資料は、新聞や書籍で伝えられている彼の生涯を裏付けるものとなるだろう。

今回の特集は、大槻幸之助資料の調査・研究を進める上での大きな一歩である。続く後編の登場が待ち遠しい。

JICA 横浜海外移住資料館
渡邊由紀子 (学芸員・司書)

資料 大槻幸之助寄託 JICA 横浜海外移住資料館
国立国会図書館 宮城県立図書館
検索 広島市立中央図書館
広島県立図書館

「日本の1カ年の砂糖消費は価格にして、3000万円以上。3分の2は輸入にたよっている。将来の産糖地として囑望されるのは、小笠原・大島・琉球諸島・台湾島である。なかでも台湾島は栽培、条件、面積において群を抜き、ここにハワイ式のプランテーション経営を取り入れ製糖事業を行なえば、生産量は飛躍的に増える。」



収穫に3カ月の差 巨大な農場

「地形」

パバイコウはハワイ島の東北岸にあり、ヒロ港より2マイル、面積はおよそ6,000エーカー、1カ年の砂糖生産量は1万1,000トン内外でヒロ郡最大の産地である。

昔にマウナケア山が控え、年中海から吹いてくる貿易風、数年前までは毎日多少の雨に恵まれたが、このころは森林の開墾が進むにつれ雨量が少なくなり最近ではひでりを見られるようになった。

しかし、パバイコウでは水利の便がよく、他のプランテーションのようにかんがいのための水路を設ける必要もなく、きび出しにも「フルム（水ひ）」が使われ製糖工場の近くまで運ばれている。

「気候」

夏は日中84〜85度、朝夕70度。冬は80度

以上、朝夕に冷気を覚えるが霜はない。マウ

ケアナ山の頂きは冬期は白雪があり、今年1月には中腹まで大雪であった。7月には残雪が点々と見られた。冬期は北風があり、時々強く吹き続くことがあるがきびの生産には影響はない。

「土地」

赤間土が多いが、粘土質、腐食土、熔岩がまじる上もあり、一様ではない。新しく開墾した土地の生産量はきわめて良好であるが、年を経るに従って施肥が必要になる。長い間の栽培で表土が薄くなると、牧草を育て牛馬の放牧場として休耕して土地を育てる。地形は海から山に向かってゆるやかな登り勾配になっていて、山すそから山腹に向けての開墾は今でも続いている。山際と海際の気温はかなりの差があり、きびの成熟にも3〜4カ月の差がある。それだけ広いということだ。

「土づくり」

「ハンド・プラオ（すき）」

人力で開墾地の荒おこしをする。3人で3頭の耕馬を操る。1人は手綱を持ち馬を馱し、1人はすきを手に、1人はすき先が拾いあげた樹根を石ころを「ホウ」または「ベッキ」で除く。1日の作業量は1.5エーカー。

「マシン・プラオ（すき）」

機械で荒おこしと整地をする。1人で3頭の耕馬を操る。荒おこしする時は後方に樹根と石ころを除くためもう1人必要とする。1日の作



② 3カ月後、2回目の除草。

③ 5カ月後、畝間をプラオ（すき）で上壤を打ち返す。カルチ・ベーターも用いる。1エーカーあたり250斤位の骨粉を散布。「ホウ」で軽く土をかける。

④ 7カ月後、畝間をプラオで4度往復して、畝に土をかける。根元に骨粉を蒔き土をかける。これから次第に畝の元寄せを少なくして平らになるようにする。

⑤ 10カ月後、枯れた1番葉を取り除く。「ホウ」にて除草、共に根元に置く。2人以上が畝の右左に分かれ、8人で1エーカーを受け持つ。

⑥ 13カ月後、2回目の枯れ葉を取る。大切なことは緑葉を取ると収穫量に影響する。

⑦ 18カ月後、3回目の枯れ葉取りは収穫前の1カ月前。刈り取りの準備も兼ねる。きびの葉は人の肩より上に畝の両方から繁っている。

「2番作」

1番の収穫時の切り捨てた茎葉が十分乾燥したことを見届けて焼き払う。切り株の高さは地面と接するところまで切り揃える。その後は1番作と同様の手順を繰り返す。通常、2番作は1番作の半分程度の収穫だが利益は十分ある。

「1人1日、4トン刈る」

毎年、1月頃から7〜8月頃まで。糖分の多い時期は4〜6月の3カ月間。刈り取りは、ケーン・ナイフで地面に接する部分、なるべく地表に近いところで切る。きびは頂部分を切り取り、およそ3フィ



「ヤーロー・カレドニア」

3〜4年前にマニラからカウアイ島に伝来。茎は黄色を帯び長く大きいのが特徴。風に強いが折れやすい。葉は濃緑色。熟期はラハйна・ケーンより早く、除草は2回ですむ。1エーカーあたりの収量は45トン前後。砂糖1トンの生産に必要なきびは8.5トン。

「編みび」

7種類あるが、赤い茎に緑の筋の入ったものが良種。背丈は前2種より高く、茎廻りは8インチ位、大きいものは1フィート以上。

「ロー・パンブー」

1871年頃マニラからハワイ島ハマクアに伝来。ハマクアきびとよぶ。茎は紫色を帯び、丈は高く、茎・葉共に小さい。やや低温地でもよく育つ。収穫量はラハйна・ケーンと同量。砂糖1トンの生産に必要なきびは8.5トン。

「赤きび」

茎は赤色を帯びる。丈は高く収穫量は多いが糖分は少ない。そのため生産性は低い。砂糖1トンの生産に必要なきびは14トン。

1回の植え付けで2度収穫

「1番作」

① 植付けて1ヵ月後に除草、茎の廻りを手作業で畝の中央に寄せ軽く土をかける。1日5人位で1エーカー。後に畝間にカルチ・ベーターを用い土を攪拌する。1人が1頭の耕馬を使い1日2エーカー。

業量、熟地2.5エーカー 荒おこし2エーカー。

「バーロー（耙労）」

荒おこした土地をかきならす。馬3〜4頭、1人1日2エーカー以上かきならす。

この仕事は荒おこし直後に1回、数日を経て1回、都合2回繰り返す。稲田と同様の作業。

「カツチ・プラオ（畝すき）」

すじを切る作業。3人の手と5頭の耕馬で作業をする。

「畝」

畝と畝の間は4.5フィート、パバイコウでは5フィート。やせた土地では幅をせまく、肥沃地では5〜6フィートにする。畝を作ったあとは、底土用のすきを使い底土を柔らかくする。作業は1頭の耕馬、力の弱い耕馬は2頭とする。肥料は1エーカーあたり250斤の骨粉をまく。その上を「カルチベーター（カラベラ）」を使って土とよく攪拌する。深く耕すことにより除草も楽になり、2番収穫量も多くなる。2番収穫量は最大で1番収穫量の70%位となる。

1トンの砂糖にきび約8トン

「ラハйна・ケーン」

葉にとげの多いことからイガキビとよばれる。1801年マウイ島ラハйнаで発見。その後、同島スプレックスでこの良種が発見されラハйна・ケーンはきびの王と称せられた。5年後、ハワイ島へ伝来、葉のふちは鋭利（ハ）

トの長さに揃え、60斤位にしてきびの葉でしばり運搬する。労働者は7エーカーに1人を配置して、1人1日4トン位刈り取る。

小さな独立 きび小作

官約移民の初期の日本労働者の賃金は1カ月に12.5ドル、その後15ドルになったが、1昨年（明治32年6月）契約労働廃止後には19ドルになった。しかし、日本人労働者は次第に少なくなっている。

荒地開墾からきびの値付け、収穫までに要する労力は1エーカーあたり120〜150人位で100ドル以上の賃金を要する。昨今は請けきび（きび作を請け負い小作をする）が増えている。明治34年のきび買い取り相場は1トン3ドル50セントであった。

小作者の中には毎日の労働に従事しながら、余りの時間で谷間などの空地を切り開き、あるいは、雇主より荒地を借り受け小作に従事して1人で5エーカーも小作するものもある。小作の方法には毎月10ドルずつ雇主より前借（肥料と農具等）して収穫後に清算する方法もある。買い取り金額は1トン2ドル位でこれを小作者の収入に換算すると、1日1ドル以上、1ヵ月30ドル位になる。

